

## エドゥアール・マネ《皇帝マクシミリアンの処刑》にみる 1860年代の画家の実践

名古屋大学 川澄 祥

本発表では、エドゥアール・マネ《皇帝マクシミリアンの処刑》を取り上げ、表現上の再評価をしたうえで、本作をスペイン趣味の集大成として、画業に位置付けることを目的とする。本作は、パリでサロンを中心に活動した画家マネが、画業中期にあたる1867年から、5回にわたる制作を経て完成させた歴史画の大作である。本作の主題は、ナポレオン3世の失政が原因とされる、メキシコでのマクシミリアン皇帝の処刑である。その事件を新聞の報道で知ったマネは、文字の情報と写真資料を基に、すぐに制作に取り掛かった。2つのヴァージョンでサロンへの出品を目指したが、事実上の検閲があったことが先行研究で明らかにされている。一度目は、主題の過激さから、自主的に出品を取りやめ、二度目は、事前に内務省から、サロン落選を示唆する非公式の通知が送られたため、出品を諦めた。その後も、リトグラフの印刷が禁止されるなどの検閲があったことが伝えられてきた。

先行研究の論点として、まずは、こうした第二帝政における表現の不自由への抵抗と、共和主義作家との団結を表すことが注目されてきた。また別の点では、スペインの巨匠ゴヤの《1808年5月3日》を中心とする着想源を論じるものや、画家自身の死の主題との結びつきを論じるものもある。しかし、いまだに研究が不十分なのは、5つのヴァージョンを通しての表現上の評価と、本作の画業における位置づけである。これらを論じることで、マネの作品の中でも、サイズが非常に大きく、後年のリトグラフ作品とも関連する重要作品である、本作の再評価ができると思う。

そのため、本発表ではまず、5つのヴァージョンの比較を通して、処刑場面背後のレンガ壁に見られる、表現上の効果を論じる。そこには、闘牛の主題との関連と、歴史画としての本作の制作態度が見えてくる。次に、先行研究を基に、闘牛や全体の構図を中心として、ゴヤの影響を確認する。最後に、1867年のパリ万国博覧会に出品された、同時代の画家の作品、および会期中の自身の個展に出品した作品と、本作を比較し、スペイン趣味の観点から、マネがそれらの作品を参照したことを論じる。これにより、本作が自他のスペイン趣味のイメージを引用し、統合した集大成と呼べる作品であることを明らかにする。

本発表によって、本作を、マネの60年代の画業で行ったスペイン趣味の表現を完成させる作品であると位置付ける。後年に本作のイメージを引用する作品《バリケード》があることは、本作が自身の引用元となるほどの中心作品であることを明らかにしており、ここから、60年代以降の画家の画業を論じるうえで、重要な作品であることを再評価できるのである。